

創業以来130余年、大成建設は「人がいきいきとする環境を創造する。」を使命に発展を遂げてきた。その高い理念と技術力を支えるのは多士済々のマンパワー。頼もしい10名の精鋭たちの仕事を5回にわたって紹介する。1回目は大規模工事の最前線から、地下トンネル工事と新築ビル工事の現場で重責を担う2名が登場。

[大成建設] ① 夢をカタチにする舞台



写真提供/大成建設

人好きで現場好き この仕事は天職です

都内港区の大規模事務所ビルの建設現場で、施工管理を担当しているのが小倉 学副所長だ。延べ床面積約12万㎡、所員約40名、作業員約300名(建設ピーク時は1,500名以上)が従事する巨大工事の工程、品質、安全、コスト、環境など、工事に関する一切を担う。「これだけの規模の現場になると、膨大な量の決めごとがあるんですよ。例えば鉄骨に空ける穴一つにしても、位置や大きさをどうするか、外壁のカーテンウォールが取り付け部材の形状をどうするかなど。構造部材、外装、中の仕上げ材まで、全部打ち合わせを重ねて

決めていくんです」

気の遠くなるような話だが、小倉副所長の頭の中は全方位にアンテナが張り巡らされ、常にフル回転状態。仕事内容が多岐にわたるため、当然のごとく関わる人も実に幅広い。「そこがこの仕事の魅力だと思うんですよ。発注していただいたお客様や設計事務所さん、現場の作業員の方々まで、業種も立場も様々な人たちと密接に関われるんです。現場は結局、人と人。技術は会社に入って習得していけますが、まず人が好きであることが第一ですね。綿密にコミュニケーションをとった成果が目の前で形になって残るわけですから、やっぱり充実感があります」

入社時から現場管理を希望していた

小倉副所長が、初めて配属されたのはビジネスホテルの現場だった。外装が出来上がり、外側に組んだ足場が一気に外されて、中の建物が姿を現した時の感動が忘れられない。「“現場ってコレだよなあ!”って感激しましたよね。入社から5、6年位は頻りに現場に出て、作業員の方たちと一緒に汗水たらしていました。その時期のことは今でも絶対に忘れられないし、この仕事は天職だと思いましたよ。作業員の方に自分の意図が伝わって、思い通りのものを造ってもらえた時は本当に嬉しくて、やっぱり現場が好きですね」

早い時期から責任ある仕事を任されてきた小倉副所長だが「よくやらせてもらったと思う」と振り返る。

「大成建設には若手にチャンスを与える気風が伝統的にあるんです。でも今考えると、きっと後ろで先輩方がフォローしてくれていたんだろうな。本人は気持ちよく現場を仕切っている気でしたけど(笑)」

撮影のため作業中の現場に立つと、表情もキリリ。根っからの現場マンには、やはり現場がよく似合う。



視線はいつも全方位へ。現場監督の眼差しはいつも厳しい。

厳しい現場こそ 技術者冥利

東京・新宿は初台の地下を降りていくと、ぽっかりと口を開ける巨大空間がある。これが噂の地下トンネルか。延長工事が進む首都高速中央環状新宿線のうち、山手通りの直下2.7km区間にシールド(円筒形の掘進機)工法でトンネルを造る「代々木シールドトンネル(内回り)」の現場だ。完成すれば首都高の渋滞がぐっと軽減される一大プロジェクトだけに、世間の注目度も極めて高い。

この現場で監理技術者として技術面の計画から対外折衝まで幅広く担当しているのが、谷口 敦氏だ。

「普通のトンネルは、ある程度単調作業なんです。でも、ここはかなり複雑で、区間内に首都高の出入口が3カ所、空気の換気所が2カ所ある。真上を走る山手通りの4車線を確認しつつ工事を進めなければなりませんし、橋が2カ所、鉄道が3本通る真下での工事なので、高度できめ細かな技術力が必要です。それぞれ適切な工法や補強方法を検討していくのですが、刺激の連続で飽きる暇がないですね。コストや工期を大前提に、設計面の発想と、現場でどう合理的に進めるか知恵をひねる。プロセスを考えるのが面白いんですよ」

学生時代から「土木史に残るような大きな仕事がしてみたい」と考えていた谷口氏にとって、8年の長きにわたり携わっているこの工事は、思い描いていた

未来図に近い。「これだけの大規模工事に携わることが出来るのは、やっぱりありがたいですよ。我々が造ったものが50年、100年、300年と残るかもしれない。微力ながら社会貢献の意義もあると思います。もちろん常に緊張感がありますよ。ちょっとした忘れ物や判断ミスが、大きな事故や取り返しのつかないことにつながりかねない。でも、仕事は大変だからやりがいがあるんです。今の現場のように色々課題が多い方が、順風満帆よりもやる気をかきたてられて面白い。技術者冥利に尽きますね」

取材中、谷口氏は何度も「面白い」という表現を使った。次々立ち塞がる難敵も、手強いほど腕が鳴る。嬉々として真剣勝負に挑んでいく姿が目に見え



地下にある現場へ行くと、技術者としての顔をのぞかせた。

ようだ。

「ひとつ終わるとまた新しいことがやりたくなって、新しい仕事の話が来るとアドレナリンが出てくる。職業病でしょうね(笑)」
休日はスポーツで汗を流し、趣味の料理を家族にふるまうよきパパだ。餃子は皮から作り、タマネギを2時間炒めてカレーを作ることもある本格派。仕事も趣味も、手を抜かないから面白い。



File 002 建築施工

東京支店
(仮称)汐留I2プロジェクト新築工事
副所長

小倉 学
Manabu Ogura

自分の“地図に残る仕事”

入社1年目/東京支店作業所(都内のビジネスホテル)に配属。「ものづくり」のスタート。

入社3年目/神戸支店作業所(駅前再開発)に転勤。

入社5年目/尼崎在任時に阪神淡路大震災に遭う。かなり強烈な体験となる。

現在/入社6年目に東京支店に戻り、大型ビル建設に携わる。

現在5物件目(汐留のプロジェクト)。未だ「ものづくり」の勉強中。

File 001 土木施工

東京支店
代々木シールド工事
監理技術者

谷口 敦
Tsumotu Taniguchi

自分の“地図に残る仕事”

入社2年目/静岡西部で小さな現場を1人で担当する。任せられた責任感と面白さを実感。

入社6年目/技術開発部に異動し、石油汚染土壌浄化技術開発を担当。基本的な勉強からスタート。各部署のサポートを受けながら、日本初の実用化に成功。土木学会技術開発賞を受賞。

入社11年目/かねてから希望していた首都圏の大型土木工事に携る。

現在/小さな仕事も大きな仕事も変わらないと実感。誠意と信念で楽しく仕事をしていきたい。